

村岡健次著

## 『ヴィクトリア時代の政治と社会』

松浦 高嶺

一

「わたくしたちの目的は、貴族の支配をひっくり返すことではないのです。わたくしたちは、これからも、政府と國家の要職をかれらの手に委ねるでしょう。というのも、わたくしたち中流階級の間は、國家の仕事遂行するためには、特別な人間、つまり何代にもわたってその仕事のために生まれ、かつ育った人びとで、しかも大局的な視野から自らの判断で行動できる地位にある人びとがどうしても必要だということが、よくわかっているからです。」

以上は、フランス人イポリット・テーヌが一八六〇年代のイギリスで、急進主義を奉じ、ジョン・ブライトを支持する一人の大工業家から聞いた話として、彼の『イングランドに関する覚書』<sup>①</sup>(一八七二年)の中に記載したものである。村岡健次氏は、十九世紀のイギリス——とりわけ一八四〇—一八七三年のヴィクトリ

ア中期——における政治・社会・文化の支配権が依然として地主階級によって掌握されていたという、同氏の著書の中心的なテーゼを立証する根拠の一つとして、この箇所を引用しておられるのである(村岡著、一五八一—一五九頁。以下、村岡著からの引用は頁数のみ記す)。十九世紀イギリス社会における土地貴族階級(地主階級<sup>②</sup>)と中流階級(ブルジョワジー<sup>③</sup>)の両者は、そもそもどのような社会総体の中のどのような部分としてそれぞれを位置づけ、またどのように両者を関係づけるべきかという問題は、内外の学界において今日なお様々に論議されているのであるが、まことに偶然にも、この問題をめぐる三つの相異なる見解の提唱者が、自説を裏付けるためにいずれもテーヌの前掲の『覚書』から引用している事実注目したい。

その第一はいうまでもなく村岡氏であるが、第二は、村岡氏とは反対に、ヴィクトリア朝イギリス社会のヘゲモニーはブルジョワジーによって確保されていたと主張するロバート・グレイである。グレイは『ヴィクトリア朝エディンバラにおける労働貴族』<sup>④</sup>の著者として、村岡氏によっても紹介されているが(二二〇—二二二頁)、彼が「ヴィクトリア朝イギリスにおけるブルジョワジーのヘゲモニー」と題する小論において引用するのは、前掲の箇所<sup>⑤</sup>の後にすぐ続く、村岡氏によっては引用されていない、以下の短い一節である。

「彼らをして統治せしめよ。ただし、統治するにふさわしからしめよ。(Let them govern, but let them be fit to govern.)」

急進主義者の大工業家はテームにむかってそのように言い足したのであるが、村岡氏とは反対にその箇所だけを引用するグレイによれば、「統治における、そして國家における土地所有者の役割は、しっかりとこの文脈の中で定められねばならない。……ヘゲモニー階級 (hegemonic fraction) と統治階級 (governing fraction) との関係は、まさにこの十語に要約されているのである」と。

グレイの論旨をもう少し説明すると、およそ以下の通りである。そもそも「ヘゲモニーとは、社会における政治上・イデオロギー上のリーダーシップを可視的に行使する集団に認められるべきではなく、むしろ、政治上・イデオロギー上の実践の最も有力な形態の成果の中に見出されるべきである。」(傍点箇所、原文ではイタリックス) したがってヘゲモニー階級とは、国家権力の行使に際してその階級利益が他のいかなる階級よりも優越する人々であり、統治階級、すなわち、国家統治機構のトップ・レベルのスタッフを構成する人々とは区別されねばならない。このように両概念を峻別するグレイにとって、ブルジョワジーがヘゲモニー階級、土地所有者が統治階級を意味することは、断るまでもあるまい。ということは、ブルジョワジーこそがヴィクトリア朝イギリス社会の眞の支配階級だったのであり、テームに語られた大工業家の言葉も、最大の力点は：Let them govern, but let them be fit to govern. という末尾の十語におかれるべきだったのである。

そして最後に、第三の事例は、『中期ヴィクトリア朝イギリス、一八五一—一八七五年』の著者ジェフリー・ベストによる、同著

第四章「中期ヴィクトリア朝の社会秩序」における引用である。ベストはそこで、村岡氏による引用部分とグレイによる引用部分を通して前後の文章を讀者に提示しながら、次のように述べている。

「貴族階級の政治的・社会的優越に對する、以上のように安易で自己満足的な黙従は、十九世紀六〇・七〇年代の中流階級の間に支配的であった……かのように思われる。」(傍点は松浦) たしかにそれはほぼ事実として認められるが、しかし「テームの友人も言っているように、貴族階級は効果的に統治せねばならなかった。」(傍点は松浦) そもそも貴族階級がその支配を中流階級にとつて「受け容れられるもの」とすることができたのは、彼らの「政治的英知」の故にであったし、また「有資格上昇者にとつてこの階級が究極的には到達可能である」ためでもあった。だがそれにとどまらず、彼らがその支配を中流階級にとつて「積極的な価値のあるもの」とさえることができたのは、彼らが「仕事をする貴族階級 (working aristocracy)」だからであった。すなわち、政治家として、中央・地方の行政官としてはいうまでもなく、さらには、銀行、鉄道・運河会社、船渠などの大企業の重役として、そしてまた都市と農村の双方においてその活用により利潤を上げる土地所有者として、彼らは中期ヴィクトリア朝社会に「積極的な価値のあるもの」と評価された。そのような価値ある存在であったからこそ、貴族階級は効果的に統治することができたし、その政治的・社会的優越に對する中流階級の黙従を確保することもできた。以上が、テームの『覚書』から大工業家の言葉を引用するベストの所論の要旨である。

## 二

村岡氏は十九世紀イギリス史の理解をめぐって、「従来の通説」と「新しい史観」との以下のような比較対照を試みておられる。すなわち、「従来の通説は、産業革命の進展とそれにもとづくブルジョワ階級の……経済力の増大をそのままかれらの政治支配権の増大と同一視する傾向があった。しかしながら、このさい、われわれもまたはっきり留意しておかなければならないのは、第一次選挙法改正と穀物法廃止という画期的事件のあとに到達した一八五〇—一七〇年代のウィクトリア中期においてさえも、上下両院をはじめとする全イギリスの政治機構は、なお地主階級によってほぼ完全に掌握されていたという事実であって、この事実を重視するかしないかが、従来の通説と新しい史観の決定的な分かれ目となるのである。すなわち、政治的な支配体制という見地からすれば、一八七〇年代まで、イギリスは地主階級による貴族政の国家だったのであって、新しい史観は、この事実の評価とその史的意義を問うことで新しい歴史像の再構成をめざすもの、ということがいえるであろう。」(三頁)

これは要するに、「ブルジョワ」支配階級説と「土地貴族」支配階級説との二分法であり、この二分法を適用すれば、前述のテーヌ『覚書』引用者の中では、第一の村岡氏と第三のベストが「土地貴族」支配階級説、そして第二のグレイが「ブルジョワ」支配階級説ということになる。しかしながら、テーヌからの引用の仕方、力点のおき方における三者間の微妙な相違によっても示唆されているように、村岡氏の十九世紀イギリス史像構築の特

徴は、三つの類型のうちの一つとして、他の二者との比較の作業の中から明かにすることが期待できないであろうか。本書評は、村岡著の内容の章構成順の紹介、各章ごとの論評といった通例の方法をとらず、敢てそのような学史上の比較論的な試みを企ててみようと思う。そのためには、まずはじめに、村岡氏の描く十九世紀イギリス史像の、とくに注目に値する側面を、氏自身の言葉を用いながら、ここに再現してみよう。

すでに指摘したように、「政治的な支配体制という見地からすれば、一八七〇年代まで、イギリスは地主階級による貴族政の國家だった」(三頁)。「この体制はいうまでもなく貴族・ジェントリによる大土地所有制にその社会経済的基盤をおいている。それはすでに十八世紀の方、長子相続制と継承的不動産処分の法慣行によって支えられていたが、これらの諸制度は、十九世紀末葉『土地問題』の嵐がそれらを規制する諸立法を生み出すまで有効に維持された。」(九頁)

ところで、「政治の支配者である地主階級は、同時にイギリス社会における価値意識の支配者でもあったのであって、地主階級の価値体系が、そのまま社会の価値体系であった。」(一三頁)

「政治家たるものはジェントルマンでなければならぬというのが、選挙民一般をも支配する社会の価値体系だった」のであって、「政治支配の問題は、決して経済力だけでは説明がつかない。それは同時に文化・教養の問題でもある」(六六頁)ことを銘記せねばならない。

「このジェントルマン理念の核心をなすものは、十六世紀この方、この国の特徴的なエリート教育制度(パブリック・スクール

とオックスフォード、ケンブリッジ両大学)がつかつてきたルネッサンス人文主義の教養であつた」(一四頁)。

およそ、地主、ブルジョワ、労働者という「三大社会階級のチームは、十九世紀のイギリス史が何よりも工業化の進展に伴つて資本主義の生産関係が現実社会全体に拡大かつ行なわれていく過程であつてみれば、この時代の歴史を描く上に不可欠のもの」(一三一—一四頁)といわねばならない。「だがわれわれは……この三大階級のチームが地代、利潤、賃金という所得形態の差違にもとづいて創り出された概念であるということ、それゆゑに社会の生産力と生産関係の矛盾(＝階級闘争)を分析、叙述するには適していても、生産とは反対の消費にもとづく社会象をよく説明するものではない、ということに注意する必要がある。」(二二—一四頁)消費にもとづく社会象、すなわち「伝統的な価値体系の支配、中流階級の社会的上昇、労働者階級の『目上の人びと』への尊敬と恭順といった社会象」(一四頁)は、社会階級のチームよりもむしろジェントルマン、ノン・ジェントルマンという階層チームによつてよく説明され得るものである。

同じ十九世紀でも、一八一五—一四〇年代は、第一次選挙法改正と穀物法廃止の時代で、地主対ブルジョワの階級闘争が顕著であつたから、階級チームで説明するのが適切と言えるかもしれない。しかし一八四〇—七三年のイギリス資本主義の黄金時代にいたつて、中流階級の消費生活の変化を通じて一つの「革命」がもたらされ、その結果、「ジェントルマンの地位を求める階層の意識……が、中流階級の大勢を制してしまつた」(二二三頁)。

こうして、「イギリス中流階級は、いまや完全にジェントルマ

ン階層秩序の枠内に取りこまれた。であるとすれば、このとき以後一八七〇年代にいたるヴィクトリア中期には、中流階級をめぐる社会の改革は、もっぱらジェントルマン・ノン・ジェントルマンという伝統的支配のフレームのなかで進行するほかはないということになる。」(一二四—一二五頁) その最も代表的な事例は、中流階級(ノン・ジェントルマン)内部からの、新たな専門職業人階層のジェントルマンへの上昇転化であつた。村岡氏の描く十九世紀イギリス史像は、強いて概括化すればおよそ以上の通りであらう。

### 三

村岡氏の描く十九世紀イギリス史像をめぐつて、二つの論点を指摘してみよう。その第一は、地主・ブルジョワ・労働者という三大社会階級概念を前提とした上での、「地主」支配階級説である。さきにも指摘したように、村岡氏は、第一次選挙法改正と穀物法廃止の両事件を経過したヴィクトリア中期においてさえも、イギリスの政治機構はなお地主階級によつて掌握されていたという事実を重視し、この事実を認めるか否かが、従来通説と新しい史観の決定的な分かれ目になる、と述べておられる。しかしながら、たとえばわが国の学界で十九世紀イギリス史の理解をめぐつて村岡氏と最も鋭く対立する吉岡昭彦氏は、次のように論じておられるのである。すなわち、「第二次選挙法改正直後の議会において、土地所有者がなお自由・保守両党議員の半数以上を占めていたが、産業資本の『世論』が、労働者階級のそれを『国民的利益』の名において包摂し従属せしめつつ、国政のうちに反映さ

れ実現されて行く関係の制度化が完成され、もはや『貴族の連合体は産業資本の業務を代行する機関』（マルクス）にすぎなかったのである。」<sup>⑩</sup>

以上の吉岡氏の解釈は、土地所有者階級を統治階級として捉え、彼らが国家統治機構のトップ・レベルをほぼ独占していた事実を認めた上で、真の支配階級（ヘゲモニー階級）はブルジョワジーであった、と主張するグレイの所説と基本的に一致するといえよう。『近代イングランド社会の起源、一七八〇—一八八〇年』の著者ハロルド・パーキンも、この点に関しては、全く同様な見解を表明している。以上のように、村岡説を吉岡「グレイ—パーキン説」と対比してみれば、双方の見解の決定的な分かれ目は、むしろ、支配を政治的ないしは社会的・文化的支配に重点をおいて捉えるか、それとも経済的支配に重点をおいて捉えるか、という点に存するとみるべきであろう。「可視的な統治階級」（地主階級）の背後に「真の支配階級」（ブルジョワジー）を洞察するという分析方法は、経済決定論におちいる恐れを感じさせるが、政治的支配か経済的支配かという二分法を克服するためには、やはり政治と経済の接点として、統治階級の諸々の政策を階級利害的な視点から究明する努力が必要である。「彼らをして統治せしめよ。ただし、統治するにふさわしからしめよ。」という大工業家の言葉は、グレイやベストも指摘するように、そのような趣旨において注目に値するのである。

四

第二の論点は、伝統的な価値体系の支配、中流階級の社会的上

昇、労働者階級の「目上の人々」への恭順など、総じてヴィクトリア中期の社会現象は、社会階級のカテゴリーよりもむしろジェントルマンとノン・ジェントルマンという階層カテゴリーによって、よりよく説明され得るということ。前述の第一の論点とのつながりが必ずしも明確ではないが、恐らく村岡氏の意図としては、「従来を通説」（「ブルジョワジー」支配階級説）を受け止めてその誤りを正すというネガティブな目的のために第一の論点を提起したが、ヴィクトリア中期のイギリス社会の全体像を積極的に展開するためには、第二の論点がかかるかに効果的と考えられたのであろう。

村岡氏は社会階級カテゴリーと階層カテゴリーとを対比して、前者が社会の生産力と生産関係の矛盾、すなわち階級闘争を分析・叙述するのに適格的であるのに対して、後者は生産とは反対の消費にもとづく、上記の社会現象を説明するのに適格的である、と述べておられるが、この主張は必ずしも十分に説得的ではない。そもそも、伝統的な価値体系の支配とか、中流階級の社会的上昇といった社会現象が、生産とは反対の消費にもとづくもの、とはどういうことであろうか。

村岡氏はこの点を説明して、それらは「総じて地位あるいは地位を求める人間の欲求にすぐれて係わるもので、経済的には消費生活、それゆえに見栄という人間本能に深く根ざすものだからである。」（一四頁）と論じておられる。そこで、「ブルジョワ階級を誘惑し、中流階級の有名な社会的上昇を生んだ身分と地位の神話」の重要性を強調するベリ・アンダソンの所説が援用されるのであるが、村岡氏とアンダソンの両者の構想や方法は、必ずしも

基本的に一致しているとはみなし難いのである。

すなわち、アンダソンは村岡氏とは異なって、一貫して社会階級カテゴリーによってイギリス社会の全体像の描出を試みる。彼のやや難解な構想は、E・P・トムソンとの論争によって幾分明確化されたのであるが、敢て概括化を試みればおよそ以下の通りである。

(一)土地貴族階級は、ダイナミックな農業資本主義の担い手として、すでに十八世紀の間に「イギリスで最初の支配的資本家階級」となっていた。十九世紀における産業ブルジョワジーの登場には、この土地貴族という、彼らに先行する資本家階級の存在が前提条件となった。その意味において、旧来の土地貴族と新興のブルジョワジーとの間には、はじめから基本的な敵対矛盾は存在しなかったのである。

(二)産業ブルジョワジーは、第一次選挙法改正と穀物法廃止という二つのささやかな勝利を達成した後、十九世紀中葉以降、土地貴族階級と融合して単一のヘゲモニー階級を形成する。この新たな上流支配階級に対する「貯水池」を構成したのは、企業家・専門職業人・俸給生活者などの中流階級であった。

(三)土地貴族階級の経済力の絶頂期に農村地帯で創り出された「一見『封建的な』身分と地位のハイアラキー」が、イギリス社会の様々な社会関係の基本的モデルとなった。このハイアラキーは土地貴族階級の視点からの社会投影図であって、社会階級構成という一次的な現実とも、社会移動という二次的な現実とも直接符合するものではないが、「身分と地位の神話」として、中流階級の社会的上昇を助長した。

以上のアンダソンの構想の中で、「身分と地位のハイアラキー」が村岡氏のいうところの「ジェントルマンノーン・ジェントルマンの階層秩序」（一二五頁）に該当するのであろう。しかし両者の大きな違いは、村岡氏が社会階級カテゴリーを斥けて、中期ウィクトリア社会に適合的な分析手段として選ばら階級カテゴリーのみを使用しようとするのに対して、アンダソンは社会階級カテゴリーを一貫して使用しながら、身分・地位ハイアラキーを社会関係モデルとして補完的に活用している点である。

「その〔土地貴族階級を担い手とする農業資本主義の〕成功は、産業ブルジョワジーの興隆に対して、経済史の上では『床』を、社会史の上では『天井』を形作った。」

これはアンダソン独特の比喩的な表現であるが、その趣旨は次のように解すべきであらう。すなわち、土地貴族と産業ブルジョワの両階級の関係は、それを社会の総体の中で捉えようとする場合、一方を支配的、他方を従属的と、安易に断定できない。十九世紀産業資本主義の成立に対して、農業資本主義は賃労働の創出⇨労働力の商品化などの形で、不可欠な客観的条件を用意した。

「床」という言葉は、そのような文脈の中で理解されねばならないであらう。そもそも、土地貴族階級の主たる収入源が、資本主義生産の生み出す剰余価値の一部としての地代であったことは、いまさら断るまでもあるまい。しかしながら、また一方においては、土地貴族階級こそは、産業ブルジョワジーを社会的上昇へと誘い、彼らの一体性を喪失せしめた「身分と地位の神話」の供給源——すなわち「天井」——でもあったのである。以上のように、土地貴族階級が同時に「床」ともみなされ、「天井」ともみなさ

れるような複合的な視点は、社会階級カテゴリーと社会関係モデルとの併用によってはじめて可能となることを強調しておきたい。最近、十九世紀イギリス社会の階級構造をめぐって注目に値する論文を発表したW・D・ルビンスタインは、「……：大学レベルにおける経済史と政治史との二分法のために、近代イギリスの社会構造の全体的な発展を斬新な言葉で説明しようとする試みは、奇妙なことにごく僅かしか見当らない」と慨嘆しながら、彼の知る限りでの三つの例外的業績を指摘している。それはパーキンの前掲書とR・S・ニールの『十九世紀の階級とイデオロギー』、そしてアンダソンの「現代の危機の諸起源」である。村岡氏はこれら三者のいずれにも言及しておられるが、恐らく最も高く評価し、参考にされたのは、アンダソンの論文であったろうと推測される。それにも拘らず、遺憾なことに、経済史と政治史（ならびに社会史・文化史）との二分法を克服しようとするアンダソンの積極的な試みが、村岡氏の場合には必ずしも十分には受け継がれていないように思われるのである。

五

村岡氏は、同じ十九世紀でも、一八一五—四〇年代は地主対ブルジョワの階級闘争が顕著であったから、社会階級カテゴリーで説明するのが適当かもしれないが、その後のウィクトリア中期においては、中流階級は完全にジェントルマン階級秩序の枠内に取りこまれてしまったから、中流階級の社会的上昇というこの時期の重要な社会事象は、別して、階層カテゴリーによる説明が肝要であると主張される。そして中流階級の内部からの専門職業人の

社会的上昇を説明するに当っては、主要な研究文献の一つとして、W・J・リーダーの『専門職業人、十九世紀イングランドにおける専門職業階級の興隆』を参照しておられる。一八四一年以降の国勢調査において「専門職業人」の項目に繰り入れられた職種とその年代を確認する作業が、リーダーの研究成果を活用することによって進められ（一五二—一五三頁）、その手続は全く正確である。だが、リーダーがこのまことに興味深い著書を執筆した、そもそもの問題意識は何であったろうか。それは、彼自身の言葉で次のように表明されているのである。

「……：われわれが承知している諸々の専門職業は、大方、ウィクトリア朝の産物であって、工業社会の各種の必要に役立つために創り出されたものであった。しかし、ウィクトリア朝イングランドの他の多くの事象と同様に、それらはもつと古い、そして、非常に異なった諸制度の外形を装う場合が多かったのである。」

（傍点は松浦）

ここでリーダーが強調しようとしているのは、資本主義生産力という「実体」とジェントルマン的階級秩序ないしは価値体系という「形相」との両者を総合的に把握することによって、ウィクトリア朝専門職業階級の歴史は、はじめて理解が可能だということである。すなわち、リーダーによればこういうことである。たとえば一八五九年の『同時代評論』においては、「専門職業はその構成員にジェントルマンという、長いしぎたりの中で定められた身分を授与する」と規定しながら、ジャーナリズムの職種は専門職業のリストには入らないという厳しい評定を下している。そして翌一八六〇年の『土壌評論』においては、「……：ジェン

トルメンは女王もしくは国教会以外のものに仕えてはならないし、もし彼らが行なった仕事に対して他人から支払を受けるようなことがあるとしても、それは法廷弁護士もしくは医師としての場合に限られる」と言明された。しかしながら、以上のような伝統主義の厳しい制約にも拘らず、ジャーナリストは土木技師などの職種と同時に、一八六一年の国勢調査で専門職業人のリストに加えられたのであった。それはやや短絡的にいえば、まさしく「工業社会の各種の必要」が然らしめた結果であり、こうしてジャーナリストや土木技師は専門職業階級に迎え入れられることによって、「アウトサイダーからインサイダーに転じた」のであった。

以上のリーダーからの引用によっても明かなように、専門職業諸階級興隆の歴史において、「長いしきたりの中で定められた身分」の側面が占める比重は極めて大きく、この側面にわが国ではじめて本格的な分析を加えた村岡氏の功績は高く評価されねばならない。しかしながら、リーダーは彼独自の問題意識に立脚して、他方では、たとえば鉄道業の発達と専門職業人の興隆との因果関係を、次のように指摘している。「鉄道はあらゆる職種の専門職業人、とりわけ技師、法律家、会計士などの職種に対して、まことに大きな機会を提供した。イングランドにおける鉄道建設の隆盛期が四〇年代であったことと、国勢調査で記録される土木技師の人数が一八四一年の八五三人から十年後の三〇〇九人へ増加したことは、どうしても偶然の一致とは考えられない。」

もしも村岡氏のように、中流階級の社会的上昇という社会現象を、生産とは反対の消費にもとづくものとして捉え、もっぱら階層カテゴリーのみによってこれを説明しようとするならば、その

ような視座からは、鉄道業の発達と専門職業人の興隆との因果関係という問題は把握できないであろう。リーダーの接近方法は、われわれにとつて極めて貴重な示唆を与えてくれるように思われるのだが、如何なるものであろうか。

## 六

村岡氏の著作は、ヴィクトリア時代政治・社会史に関する、わが国で恐らく最初の本格的な研究といえよう。経済史・経済学史、あるいは政治思想史・社会思想史、そして文学史などの分野では、わが国でも十九世紀のイギリスに関するすぐれた研究がこれまで数多く出されているにも拘らず、政治史研究のみは少なからず立ち遅れていたといわねばならない。しかもその間に、イギリス本国でのここ二、三十年間のヴィクトリア朝政治・社会史研究の進展はめざましいものがあつた。そのようなかなり厳しい条件のもとで、村岡氏は十分にこれまでの研究成果を吸収し、イギリス本国での類似の文献に決して引けを取らぬ、高い水準の労作を完成された。われわれは、この並々ならぬ辛苦の成果に深い敬意を表さねばならない。

本書評は、はじめにも断つたように、そのような村岡氏の著作を、内外の学界、とりわけイギリスにおける最近の諸研究と比較しながら、その歴史像構築の特色を敢て類型的に明かにしようとした試みのものである。冒頭に示した、テーヌ『覚書』からの引用の方法における三つの類型を、ここで再度確認してみよう。村岡氏は自ら、「十九世紀イギリス史は、すでにでき上がったこの伝統的体制と工業化が生み出す革新的諸力（ブルジョワ階級と労働者

階級)とによる弁証法的発展の過程であったといわねばならない」(五頁)と、まことに的確な方法論上の指針をあらかじめ提示しながら、史実の検証過程においては、吉岡「グレイ」パーキン説を余りにも強く意識しすぎたという印象を否み得ないのである。そのために、「ブルジョワジー」支配階級説への反措定としての「土地貴族」支配階級説が、いささか一面的に強調されすぎたのではなからうか。評者自身は、むしろ、ヘストに代表される第三の類型に、現代イギリス論まで射程におさめた十九世紀イギリス史の総体的な研究として、最大の可能性を期待したい。すなわち、ヘストのいわゆる「仕事をする貴族階級」という発想、アンダンンにおける「床」と「天井」の比喩、そして、リーダーによる「形相」と「実体」の接近方法などから、われわれは有益な教示を得なければならぬ。そのような必要を痛感させてくれたところにも、村岡氏の反措定的著作の積極的価値が認められるのである。

評書

- ① Hippolyte A. Taine, *Notes on England*, translated by Edward Hyams, London, 1957.
- ② 村岡氏の用語法では、「地主階級」と「貴族・ジェントリ」がほぼ同意語として用いられている(例えば九頁)が、本稿では「土地貴族階級」(landed aristocracy)、「貴族階級」(aristocracy)、「地主階級」(landlord class)、「土地所有階級」(landowners)をすべてほぼ同意語として扱う。
- ③ 村岡氏はわが國への通説に従って、「中流階級」(middle class)と「ブルジョワ階級」とを同意語として用いる場合もある(例えば一九一―二三頁)が、厳密には、「中流階級」の主要構成員の一つが、「専門職業人」(professional men)などと並んで「商工業ブルジョワ階級」といふことになる(二二六頁)。

- ④ Robert Q. Gray, *The Labour Aristocracy in Victorian Edinburgh*, Oxford, 1976.
- ⑤ Gray, "Bourgeois Hegemony in Victorian Britain," in Jon Bloomfield, ed., *The Communist University of London: Papers on Class, Hegemony and Party*, London, 1977.
- ⑥ 村岡氏は別の場所(二二頁)では、この箇所も含めてテースから引用しておられる。だがそれでも、地主階級の支配の正当性をブルジョワ階級が承認していたという事実を裏付ける前半部分に、もっぱら力点がおかれている。
- ⑦ Gray, "Bourgeois Hegemony in Victorian Britain," in Bloomfield, ed., *op. cit.*, p. 79.
- ⑧ *Ibid.*, p. 78.
- ⑨ Geoffrey Best, *Mid-Victorian Britain 1851-1875*, London, 1971, pp. 242-243.
- ⑩ そのような方法による書評がすでに青木康氏によって試みられ、村岡氏自身がそれに答えておられる。青木康「村岡健次著『ウィクトリア時代の政治と社会』をめぐって」村岡健次「青木康氏の批判に答えて」『イギリス史研究』30号、一九八〇年。
- ⑪ 両者の見解の鋭い対立を示すものとして、とくに次を参照。吉岡昭彦「イギリス近代史研究的方法的再検討」村岡健次「十九世紀イギリス史についての方法的一考察——吉岡昭彦氏の批判に答えて——」柴田三千雄・松浦高嶺編『近代イギリス史の再検討』御茶の水書房、一九七二年。
- ⑫ 吉岡昭彦「イギリス自由主義國家の展開」『岩波講座世界歴史20』岩波書店、一九七一年、二三頁。
- ⑬ 「……ウィクトリア朝イギリスにおいて、企業家階級(entrepreneurial class)がいわばリモート・コントロールによって、すなわち、表向きに支配階級たる土地貴族階級に対して自らの理想の力

を押し付けられた。……資本家の意識は、中期ウチマツロの朝の『森の』で既に……」 Harold Perkin, *The Origins of Modern English Society* 1780-1880, London, 1969, pp. 271-272.

② Perry Anderson, "Origins of the Present Crisis," *New Left Review*, 23, 1964; E. P. Thompson, "The Peculiarities of the English," Ralph Miliband & John Saville, eds., *The Socialist Register 1965*, New York, 1965; Anderson, "Socialism and Pseudo-Emphriticism," *New Left Review*, 35, 1966. この論争は、マクドナルドの著作『先づ解決したマクドナルドを知らねばならぬ』(1969年)に因りて、マクドナルドの明確な階級意識を述べたマクドナルドの議論に成功した。……

③ Anderson, "Socialism and Pseudo-Emphriticism," p. 7.  
 ④ *Ibid.*, p. 14.  
 ⑤ Anderson, "Origins of the Present Crisis," pp. 39-40.  
 ⑥ この頃、在野の共産主義者は、マクドナルドの「マクドナルドの階級意識」(D. C. Coleman, "Gentlemen and Players," *Economic History Review*, 2nd Ser., Vol. 26, No. 1, 1973.

*mic History Review*, 2nd Ser., Vol. 26, No. 1, 1973.  
 ② Anderson, "Origins of the Present Crisis," p. 39.  
 ③ W. D. Rubinstein, "Wealth, Elites and the Class Structure of Modern Britain," *Past & Present*, No. 76, 1977, p. 117, footnote 37.

④ R. S. Neale, *Class and Ideology in the Nineteenth Century*, London, 1972.  
 ⑤ マクドナルドの「村園」が直接に及ぼした影響は、(119頁)「前掲の著者の主張は、その原形をなすの論文である。"Class and Class Consciousness in Early Nineteenth-Century England: Three Classes or Five?" *Victorian Studies*, Vol. 12, No. 1, 1968.

⑥ W. J. Reader, *Professional Men: The Rise of the Professional Classes in Nineteenth-Century England*, New York, 1966.  
 ⑦ *Ibid.*, p. 2.  
 ⑧ *Ibid.*, pp. 146-149.  
 ⑨ *Ibid.*, p. 163.  
 (立教大学文学部教授)